

2.3 選定内容

(1) 哺乳類

1) 絶滅(EX)

和名: オキナワオオコウモリ
 分類: 翼手目 オオコウモリ科
 学名: *Pteropus loochoensis* Gray, 1870
 カテゴリ: 絶滅(EX) 環境省カテゴリー: 絶滅(EX)

形態: 現在存在する2標本のそれぞれの前腕長は136mmと143.5mmである。尾はない。

近似種との区別: 現存のクビワオオコウモリとは体の前部にきわだった淡色域がない点、下腿部の背面が毛に覆われず裸出する点、全体として体毛が短く胴部の背面でも20mmに達しない点などで区別される。

分布の概要: 沖縄島からの記載があるのみである。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 本種に近縁と思われ、同種との見解もあるマリアナオオコウモリ*P. marianus*は、マリアナ諸島、カロリン諸島に分布している。

現在の生息状況: 絶滅したと考えられるが、その原因などは不明(次項参照)。

学術的意義・評価: 沖縄島から19世紀に3ないし4頭が採集されたという記録があるが、現在所在が特定されているのは大英自然史博物館の2標本のみである。記載以降の採集・観察例が一切なく、詳細は全くの不明であるが、基準標本の採集からほどなくして絶滅したとの見方が一般的である。しかし、沖縄島に分布する同属のオリオオコウモリが現在でも多数生息する事を考えるとなぜ本種のみが絶滅したのか謎である。また、形態的にマリアナオオコウモリに酷似することから、大英博物館に届けられた標本の産地の記載ミスであるとの疑いも残っている。

生存に対する脅威: 近縁とされるマリアナオオコウモリでは、ヒトによる狩猟が最も脅威となっており、その他に森林伐採、外来捕食動物の侵入・増加、大型台風の襲来などが挙げられる。

原記載: Gray, J. E., 1870. Catalogue of monkeys, lemurs and fruit eating bats in the collection of the British Museum. British Museum (Natural History), London.

参考文献: 前田喜四雄, 1986. 日本産翼手目の採集記録(II). 哺乳類科学, (52): 79-97.

前田喜四雄, 1994. オキナワオオコウモリ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 40.

前田喜四雄, 2002. オキナワオオコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 22.

Ota, H. and G. Wiles., 1992. *Pteropus mariannus loochoensis*. “Old World fruit bats: an action plan for their conservation”, S. P. Mickleburgh, A. M. Hutson and P. A. Racey (eds.), International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, 108.

Wiles, G., 1992. *Pteropus mariannus mariannus*. “Old World fruit bats: an action plan for their conservation”, S. P. Mickleburgh, A. M. Hutson and P. A. Racey (eds.), International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, 108-111.

Yoshiyuki, M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Sci. Mus., Tokyo.

執筆者名: 金城和三

2) 絶滅危惧 I A類(CR)

和名: センカクモグラ
 分類: 食虫目 モグラ科
 学名: *Mogera uchidai* (Abe, Shiraishi et Arai, 1991)

方 言 名: なし

カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I A類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR)

形 態: 小型のモグラ類である。標本が雌 1 体だけであるが、その個体については頭胴長129.9mm、尾長12mm、後足長16mmである。他のモグラ類よりも歯数が少ない(38本)ことが特徴である。

分 布 の 概 要: 尖閣諸島の魚釣島のみで記録。

生 息 地 の 条 件: この島は森林に覆われ、特に高地が比較的低温の雲霧林となっていることが本種の生息条件として重要であると考えられている。

現在の生息状況: 本標本は海岸近くの草地上で採集されたが、全島についての生息状況は不明。

学術的意義・評価: 1 属 1 種として記載された学問的にも貴重な種である。

生存に対する脅威: 1978年に導入されて増加したヤギによる島の環境破壊(植生へのダメージ、表土の流出、裸地化)が著しく、本種の生存に対する最大の脅威であると考えられる。また、生息状況や生態に関する情報がまったくないことも保護策を講じる上で大きな問題である。

原 記 載: Abe, H., S. Shiraishi and S. Arai., 1991. A new mole from Uotsuri jima, the Ryukyu Islands. J. Mamm. Soc. Japan, 15: 47-60.

参 考 文 献: 阿部 永, 1994. センカクモグラ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 33.

阿部 永, 2002. センカクモグラ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 28-29.

Motokawa, M., L. K. Lin, H. C. Cheng and M. Harada, 2001. Taxonomic status of the Senkaku mole, *Nesocaptor uchidai*, with special reference to variation in *Mogera insularis* from Taiwan (Mammalia: Insectivora). Zool. Sci., 18: 733-740.

横田泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について, 野生生物保護, 5: 1-12.

執 筆 者 名: 伊澤雅子

和 名: ダイトウオオコウモリ

分 類: 翼手目 オオコウモリ科

学 名: *Pteropus dasymallus daitoensis* Kuroda, 1921

方 言 名: なし

カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I A類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR)

形 態: オオコウモリ属(*Pteropus*)としては中型の種である。前腕長120~145mm、頭胴長190~250mm、体重325~510gで尾がない。雄の方がやや大きい。

本亜種を含むクビワオオコウモリには、頸部を淡色の毛が首輪状に被っているが、本亜種では、さらに頭頂部や前頭部、さらに胸部から腹部にかけても幅広く淡色域で白色ないしクリーム色を呈する個体が多くみられる。また、前胸部には、クビワオオコウモリの他の亜種でみられる暗色の体軸方向の帯状斑(首輪の切れ目)は見られない。雄の方が淡色部は広く、頸部や頭頂部にかけては、黄色から黄褐色を呈し鮮やかで、雌は、淡色部も白色に近い。

近似種との区別: 本亜種を含むクビワオオコウモリは、同じく沖縄島から記載されすでに絶滅したオキナワオオコウモリとは頸部を中心とした体の上面の毛が淡色である点、すねの付け根の部分に毛がはえている点、体の背面で体毛長が20mm以上に達する点などで区別される。また本亜種は、沖縄に分布するクビワオオコウモリの他の2亜種(オリオオコウモリとヤエヤマオオコウモリ)とは、頸部を中心とした淡色域の範囲が広い点で区別される。

分 布 の 概 要: 大東諸島の南大東島、北大東島。

近縁な種及び群との分布状況の比較: クビワオオコウモリの他の亜種として、エラブオオコウモリ*P. d. dasymallus*が口永良島とトカラ諸島に、オリオオコウモリ*P. d. inopinatus*が沖縄諸島に、ヤエヤマオオコウモリ*P. d. yaeyamae*が八重山諸島および宮古諸島に、タイワンオオコウモリ*P. d. formosus*が台湾の緑島にそれぞれ分布している。また、フィリピン北部の小島嶼にも本種が分布しているとの報告があるが詳細は不明である。

生 態 的 特 徴: 夜行性であり、日中は樹木の高い枝で休息する。日暮れ前後から採餌などの活動を開始する。南大東

島においては、島の内陸部に点在する池沼の一つである大池の周辺や池沼中の小島などの森林で日中、集団で休息していることが観察されている。島の内陸低地部と外側の高台の間を埋める幕（はく）と呼ばれる環状の丘陵地に残された林や島に点在するドリーネや池沼の周辺植生、防風林がおもな採餌場で、ハマヌビワなどのイチジク属やシマグワ、ピロウなど植物の果実や花、葉などを餌として利用している。南・北大東島間を移動することが確認されているがその頻度については不明である。繁殖に関しては、クビワオオコウモリの他亜種同様、交尾は10～12月に行なわれ、4～6月にかけて1仔を出産する。

生息地の条件: 食果性であること、また日中の休息場としても樹木を利用することから、森林環境が欠く事のできない重要な要素である。また、両島ともに平坦な地形であるため、台風や寒気襲来時の避難場所としても、ドリーネなどの石灰岩地形や幕林などの斜面林、池沼周辺林も重要である。また、それら森林環境も台風や冬の季節風がある程度遮断できる程度の幅や多様な植生環境が必要である。そのような環境が安定して確保されていることが生息のための条件と考えられる。

現在の生息状況: 2003年8月に行われた個体数推定調査において、南大東島において約300頭の生息が確認された。近年行われた個体数調査の中では最も高い値であるが、調査手法の違いや精度の差などで過去の推定値と一概には比較はできず、増加傾向という判断はできない。また、北大東島においては、多い時には一度に30頭程度の個体が確認されているが、目撃される時期が限られており、全く目撃されない時期もある事、本種は南北大東島間を移動することもあることを考慮すると、現在北大東島において目撃される個体が南大東島から一時的に飛来した個体であることも予想され、定住個体が極めて少ない可能性もある。少なくとも北大東島においては減少傾向にあると考えられる。

学術的意義・評価: 本亜種はクビワオオコウモリの中でも唯一、海洋島を生息地とする個体群である。それゆえ、隔離性が高く、飛翔性脊椎動物の分散能力や隔離に伴う分化のパターンや適応を検討する上できわめて興味深い。また、かつて過度の開発によって生息環境が劇的に変化したという経緯もあり、保全生態学的見地からも重要な種といえよう。

生存に対する脅威: 農作地の拡大、灌漑用ダムの建設、土地改良整備事業によって、農作地周辺の森林伐採、湿地やドリーネの埋立て、道路建設によって森林環境が現在も減少している。その結果、日中に利用する休息場所や餌となる樹木の減少が考えられる。森林面積の著しい減少や点在化が、栄養条件の劣悪化に伴う出生率の低下、さらには台風や寒気襲来時の避難場所の減少に伴う死亡率の増加につながり、これらの要因が個体群の減少を招くことが懸念される。近年は増加傾向にあるノネコによる捕殺や、外来産ヤシ科植物であるダイオウヤシとワシントンヤシの葉に絡まって死亡するケースも確認されている。また、皆伐に近い森林破壊が行われた開拓当初と農業散布や土地改良事業が盛んに行なわれた1970～1980年代という二度にわたってボトルネックとなるような個体数の減少が起きた事が推測されている事から、遺伝的劣化が起こっている可能性もある。南北大東島では島の自然を生かしたエコツアーも検討されているが、それにあたっては本種に対する過度の攪乱を回避する策も必要である。

特記事項: 国指定天然記念物（1973年） 国内希少野生動物種（2004年）。

原 記 載: Kuroda, N., 1921. On three new mammals from Japan. J. Mammal., 2 : 208 211.

参 考 文 献: 伊澤雅子・金城和三・中本 敦, 2003. *ダイトウオオコウモリ* *Pteropus dasymallus daitoensis* によるねぐらとしてのマングローブ林利用に関する研究. 「内閣府委託調査研究 マングローブに関する調査研究報告書」, 51 56.

前田喜四雄, 2002. *ダイトウオオコウモリ*. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類編”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 30 31.

沖縄県教育委員会, 1992. *ダイトウオオコウモリ* 保護対策緊急調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集, 沖縄県教育委員会, 那覇.

Ota, H., 1992. *Pteropus dasymallus* : Ryukyu flying fox. “Old World fruit bats : an action plan for their conservation”, S. P. Mickleburgh, A. M. Hutson and P. A. Racey(eds.), International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, 96 98.

Pierson, D. P. and W. E. Rainey, 1992. The biology of flying foxes of the genus *Pteropus* : a review. “Pacific island flying foxes : Proceedings of an international conservation conference”, D. E. Wilson and G. L. Graham(eds.), U. S. Fish and Wildlife Service, Washington, 1 17.

Yoshiyuki, M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Sci. Mus., Tokyo, 242pp.

執 筆 者 名: 金城和三

和名: ミヤココキクガシラコウモリ
分類: 翼手目 キクガシラコウモリ科
学名: *Rhinolophus pumilus miyakonis* Kuroda, 1924
方言名: カートゥイ(平良)
カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR)

形態: 国内のコキクガシラコウモリ類の中でも小型で、前腕長38~39mm、頭胴長36~37mm。
近似種との区別: 体毛はオリコキクガシラコウモリ*R. cornutus orii*とオキナワコキクガシラコウモリ*R. p. pumilus*の中間色を呈する。オキナワコキクガシラコウモリより小型である。前腕長はオキナワコキクガシラコウモリやヤエヤマコキクガシラコウモリ*R. perditus*より短く、オリコキクガシラコウモリとほぼ等しく、尾と耳はオキナワコキクガシラコウモリより少し短い。

分布の概要: 宮古島。
近縁な種及び群との分布状況の比較: オキナワコキクガシラコウモリは沖縄諸島に、オリコキクガシラコウモリは奄美諸島に、ヤエヤマコキクガシラコウモリは八重山諸島に生息する。

生息地の条件: ねぐらとなる洞窟と採餌場となる森林が必要である。
個体数の動向: 定量的な個体数の変化は不明である。しかし、40年程前頃には平良市でも多数の個体が目撃できたものが、30年程前から宮古島で生息を確認できていない。

現在の生息状況: 1971年7月の確認を最後に、1977年から1985年の3回の調査でも確認されていない。すでに絶滅した可能性もある。

学術的意義・評価: 琉球列島のコキクガシラコウモリ類は分類の再検討が行なわれているが、本亜種については基準標本が焼失しているため、所属がはっきりしない。ただし、伊良部島から発見されたミヤココキクガシラコウモリのもと考えられる骨格標本は、オキナワコキクガシラコウモリなど他のコキクガシラコウモリ類とは明瞭に識別され、独立種の可能性が示唆されている。標本は原記載以降、採集されていない。

生存に対する脅威: 広葉樹林の減少、土地改良や開発に伴う洞窟の破壊・消失・乾燥化、生息洞の観光化・水没などが脅威と考えられる。

原記載: Kuroda, N., 1924. On new mammals from the Riu Kiu Islands and the vicinity. Privately printed, Tokyo, 1 14.
参考文献: 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
沢田 勇, 1986. 条虫相からみた南西諸島のコウモリの分布. 遺伝, 40(9): 40-45.
下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第19集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅲ”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 103-142.
Yoshiyuki, M., 1989. A systematic study of the Japanese Chiroptera. National. Sci. Mus., Tokyo.

執筆者名: 丸山勝彦

和名: ヤンバルホオヒゲコウモリ
分類: 翼手目 ヒナコウモリ科
学名: *Myotis yanbarensis* Maeda et Matsumura, 1998
方言名: 不明であるが、沖縄島ではコウモリ類一般はカーブヤーとよばれる。
カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類(CR)

形態: 耳介や耳珠の先端が尖るというホオヒゲコウモリ属の特徴をもつ。
近似種との区別: 本土産のクロホオヒゲコウモリに近縁であり、体が黒色であるが、この種のように、その毛の先端に銀色の金属光沢を帯びない。またこの種よりも大型である。

分布の概要: 沖縄島、徳之島、奄美大島。沖縄島では北部のいわゆるやんばるの森。
近縁な種及び群との分布状況の比較: 前述のクロホオヒゲコウモリはかつて日本列島の平地部や低山帯に照葉樹林が広がっていた時に、そこに広く分布していたコウモリと思われており、九州、四国、本州から知られるが、原生的照葉樹林帯の分布域の大幅な縮小により、分布地は極限されている。

生息地の条件: 大木のある照葉樹林である。
現在の生息状況: 沖縄島やんばる地域のごく狭い限られた地域からこれまで3頭の記録しかない。他の島での分布域もかなり極限されている。

学術的意義・評価: 本種は南西諸島固有種である。
 生存に対する脅威: 原生的照葉樹林の消失。

原 記 載: Maeda, K. and S. Matsumura. 1998. Two new species of Vespertilionid bats, *Myotis* and *Murina* (Vespertilionidae: Chiroptera) from Yanbaru, Okinawa Islands, Okinawa Prefecture, Japan. *Zool. Science*, 15: 301-307.

参 考 文 献: 前田喜四雄, 2002. ヤンバルホオヒゲコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 38-39.
 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
 前田喜四雄・赤澤 泰・松村澄子, 2001. 南西諸島徳之島におけるコウモリ類の生息実態およびコウモリ類の新記録. 東洋蝙蝠研究所紀要, (1): 1-9.
 前田喜四雄・西井一浩・小栗太郎, 2002. 奄美大島からのヤンバルホオヒゲコウモリ *Myotis yanbaren-sis* とリュウキュウテングコウモリ *Murina ryukyuana* の初記録. 東洋蝙蝠研究所紀要, (2): 16-17.

執 筆 者 名: 前田喜四雄

和 名: セスジネズミ
 分 類: 齧歯目 ネズミ科
 学 名: *Apodemus agrarius* (Pallas, 1771)
 方 言 名: なし
 カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I A 類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類(CR)

形 態: 背面は黄褐色で背中中央に黒い筋がある。これまでに3頭が採集されているだけであるが、そのうちの1個体は頭胴長130.1mm、尾長118.5mm、後足長24.6mm、体重56gである。
 近似種との区別: 台湾産や済州島産と比較して臼歯列長が大きい。また、中国産と比べてやや大型であるが、標本が3個体のみであるので明らかではない。
 分 布 の 概 要: 国内では尖閣諸島の魚釣島だけに分布。国外での分布域は広く、朝鮮半島から中国南部、台湾までとヨーロッパに分布する。
 現在の生息状況: やや開けた草原で採集されたが、全島についての生息状況は不明。
 生存に対する脅威: 1978年に導入されて増加したヤギによる島の環境破壊(植生へのダメージ、表土の流出、裸地化)が著しく、本種の生存に対する最大の脅威であると考えられる。また、生息状況や生態に関する情報がまったくないことも保護策を講じる上で大きな問題である。

原 記 載: Pallas, P. S., 1771. Reise durch verscheniden Provinzen des Russischen Reichs. Vol. I. St. Petersburg, 454pp.
 参 考 文 献: 金子之史, 1994. セスジネズミ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 99.
 金子之史, 2002. セスジネズミ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 48-49.
 九州大学・長崎大学合同尖閣列島学術調査隊(編), 1973. 東支那海の谷間 尖閣列島. 九州大学・長崎大学合同尖閣列島学術調査隊報告.
 白石 哲・荒井秋晴, 1980. 第2章陸上動物調査(2)(主に哺乳動物). 尖閣列島調査報告書(学術調査編), 沖縄開発庁, 47-86.
 白石 哲・毛利孝之・内田照章, 1977. 尖閣列島から採集されたセスジネズミ *Apodemus agrarius* (Pallas) の aberrant form. 動物学雑誌, 86: 534.
 横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執 筆 者 名: 伊澤雅子

和 名: オキナワトゲネズミ
 分 類: 齧歯目 ネズミ科

学 名: *Tokudaia muenninki* (Johnson, 1946)
方 言 名: アージ (沖縄島北部)
カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態: 背面は黄褐色、腹面は灰白色である。普通の体毛の他に約 2 cm の幅広く先の尖ったトゲ状の毛 (針状毛) を持つことが特徴的である。頭胴長 120 ~ 175 mm、尾長 95 ~ 132 mm、尾率は平均 73%。

近似種との区別: 以前は同種とされていた奄美大島・徳之島に生息する近縁種アマミトゲネズミ *Tokudaia osimensis* と 2001 年に別種であることが報告された。本種の方がアマミトゲネズミよりは大型であり、尾率がやや小さいとされているが生体の外見からの区別は難しい。外見上類似した種としてはクマネズミ (*Rattus rattus*) やドブネズミ (*Rattus norvegicus*) が挙げられるが、いずれも針状毛を持たないことで区別できる。しかし、トゲネズミの幼獣は針状毛が顕著ではなく近縁種との区別には注意を要する。

分布の概要: 沖縄島北部にのみ分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 同属種のアマミトゲネズミが奄美大島、徳之島に分布することになっているが、このうち徳之島の個体群は未記載の独立種である可能性が高い。

生態的特徴: シイ林を生息地とし、特にシダや草本類の繁茂しているところで見られる。農耕地、リュウキュウマツ林ではほとんど見られない。シイ、マツなどの実、昆虫類を採食する。夜行性で土中の巣穴に住む。ピョンピョンとはねるようにして移動する。繁殖期は 10 ~ 12 月で一腹仔数は 5 ~ 10 頭である。

生息地の条件: シイ林に強く依存していると考えられるため一定面積の連続する成熟したシイ林が必要である。また移入捕食者の排除も必要である。

現在の生息状況: 1978 年に 1.73 頭 / ha の密度が報告されていた地域やこれまでに目撃例のあった地域でも現在は確認されていないことから激減していると考えられる。近年の確認例は極めて少ない。

学術的意義・評価: 沖縄島の固有種であり学術的にも極めて貴重である。アマミトゲネズミとは身体が大きさばかりでなく染色体数等も異なり、トゲネズミ類の琉球列島内における種分化、進化の問題を考える上で興味深い対象である。

生存に対する脅威: 森林伐採やダム、林道建設などによる生息地の激減・分断が最大の問題である。イエネコの糞から本種の毛が高頻度で発見された例などから、野生化したイヌ、ネコや移入種であるマングースによる捕食圧はかなり大きいと考えられる。また、移入種であるクマネズミとは生活様式が類似していると考えられクマネズミとの競合は今後の検討課題となる。これらの移入種は林道敷設の進行にともなって本種の生息地への侵入が加速されたと考えられる。

特記事項: 国指定天然記念物 (1972 年)

原 記 載: Johnson, H., 1946. The spiny rats of the Riu kyu islands. Proc. Biol. Soc., Washington, 59 : 169 172.

参 考 文 献: 金子之史, 1994. オキナワトゲネズミ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター (編), 東海大学出版会, 東京, 104.

Kaneko, Y. 2001. Morphological discrimination of the Ryukyu spiny rat (genus *Tokudaia*) between the islands of Okinawa and Amami Oshima, in the Ryukyu Islands, southern Japan. Mammal Study, 26 : 17 33.

金子之史, 2002. オキナワトゲネズミ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省 (編), 自然環境研究センター, 東京, 50 51.

三井興治・池原貞雄, 1979. 与那覇岳とその周辺におけるネズミ類・食虫類の分布. 沖縄生物学会誌, (17): 7 13.

三井興治・池原貞雄, 1983. オキナワトゲネズミ *Tokudaia osimensis muenninki* (Johnson) の日周活動. 沖縄生物学会誌, (21): 7 12.

Musser, G. G. and M. D. Carleton, 1993. Family Muridae. “Mammal Species of the World. 2nd Edition”, D. E. Wilson & D. M. Reeder (eds.), Smithsonian Press, Washington, 501 755.

沖縄県教育委員会, 1981. ケナガネズミ実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇.

Shiroma, H. and S. Ikehara, 1976. The fauna and local distribution of murine animals in the northern part of Okinawa island. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl., 2 : 59 68.

土屋公幸・若菜茂晴・鈴木 仁・服部正策・林 良博, 1989. トゲネズミの分類学的研究 I. 遺伝的分化. 国立科博専報, (22): 227 234.

WWF Japan 科学委員会 (編), 1984. 南西諸島とその自然保護 その I. (財) 世界野生生物基金日本委員会, 東京.

執 筆 者 名: 伊澤雅子

和名: ケナガネズミ
 分類: 齧歯目 ネズミ科
 学名: *Diplothrix legata* (Thomas, 1906)
 方言名: ヤマアジまたはヤマアージ (沖縄島北部)
 カテゴリ: 絶滅危惧 I A類(CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類(EN)

形態: 背面は黄褐色、腹面は暗褐色である。普通の体毛の他に背中には長さ50~60mmの剛毛と長さ約25mmのトゲ(針状毛)がある。尾にも全体に3~4mmの毛がある。尾は黒褐色であるが、沖縄島産は先端から約1/2は白色である。頭胴長220~330mm、尾長240~330mm。

近似種との区別: 近似の種は日本には生息していない。

分布の概要: 県内では沖縄島北部にのみ分布する。その他奄美大島と徳之島に分布する琉球列島の固有種である。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 本種の類縁関係は不明である。

生態的特徴: シイ林に生息し、シイなどの実や昆虫類を採食する。林縁部や農耕地を利用することもありサツマイモなどの採餌が報告されている。夜行性で、活動は主に樹上で行なう。時々地上に降りることもあるが動作は緩慢である。昼間は樹洞などで休息する。巣は樹洞内に枯れ葉などを敷きつめて作る。産仔数は2~5頭。

生息地の条件: シイ林への依存度が高いと考えられるため、本種のような大型のネズミが生息するためには一定面積の連続したシイ林が必要である。主に樹上を利用するため、林冠の連続性も必要である。また休息場、繁殖場として樹洞を利用するため、林内には本種が利用できる樹洞をもつような大木が必要である。また移入捕食者の排除も必要である。

現在の生息状況: 数年に1度程度しか目撃例がないことから個体数は極めて少ないと考えられる。

学術的意義・評価: 1属1種の日本固有種であり系統関係も解明されておらず学術的にも極めて貴重である。

生存に対する脅威: 森林伐採やダム、林道建設などによる森林生息地の激減・分断、移動経路の分断が最大の問題である。特に本種の生息にはある程度の大きさの木が必要であることから、長期にわたって維持されている森林の保全が必須である。イエネコの糞から本種の毛が発見された例などから、野生化したイヌ、ネコや移入種であるマングースによる捕食圧はかなり大きいと考えられる。これらの移入種は林道敷設の進行にともなって本種の生息地への侵入が加速されたと考えられる。また、移動経路が分断されて地上を使わざるを得ない状況も捕食の危険を増大することとなる。

特記事項: 国指定天然記念物(1972年)

原記載: Thomas, O., 1906. On a second species of *Lenothrix* from the Liu Kiu Islands. Ann. Mag. Nat. Hist., Ser. 7. 17: 88-89.

参考文献: 金子之史, 1994. ケナガネズミ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 107.

金子之史, 2002. ケナガネズミ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編). 自然環境研究センター, 東京, 88-89.

Kawamura, Y., 1989. Quaternary rodent faunas in the Japanese Islands (Part 2). Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 54: 1-235.

三井興治・池原貞雄, 1979. 与那覇岳とその周辺におけるネズミ類・食虫類の分布. 沖縄生物学会誌, (17): 7-13.

沖縄県教育委員会, 1981. ケナガネズミ実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇.

WWF Japan 科学委員会(編), 1984. 南西諸島とその自然保護 そのI. (財)世界野生生物基金日本委員会, 東京.

執筆者名: 伊澤雅子

和名: イリオモテヤマネコ
 分類: 食肉目 ネコ科
 学名: *Prionailurus iriomotensis*(Imaizumi, 1967) *Prionailurus bengalensis iriomotensis* (Imaizumi, 1967)*

*イリオモテヤマネコの分類学的位置づけには独立種とする説とベンガルヤマネコの亜種とする説があり結論が出ていない。他のRDBにおいても環境省版では独立種として、IUCN版では亜種として取り扱われている。

方 言 名: ヤマヤー

カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態: 淡褐色の地に暗褐色の斑紋が全身に散在し、後頭部から額、眼の周りには白と黒の縞が走る。耳介の後部には白斑がある。成獣の頭胴長は雄約55~60cm、雌約50~55cm、体重は雄約3.5~5.0kg、雌約3.0kg~3.5kgで、明らかな性差があり雄の方が大型である。

近似種との区別: 広域分布種であるベンガルヤマネコに近縁あるいはその亜種と考えられる。ベンガルヤマネコは種内で形態的に変異が大きく、区別点を一般化するのは難しいが、その別亜種とされているツシマヤマネコと比較すると、イリオモテヤマネコの方が全体に体色が黒っぽく四肢や尾などが太い。

分布の概要: 種または亜種のレベルで西表島の上に生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 本種と最も近縁とされる、あるいは本亜種を含むベンガルヤマネコでは、基亜種であるベンガルヤマネコ *P. b. bengalensis* を含む8または9亜種が台湾、東南アジア、中国大陸からロシアにかけて分布している。国内では長崎県対馬にそのうちの1亜種、ツシマヤマネコ *P. b. euphilura* が生息している。

生態的特徴: 餌動物が非常に多様であることが本種の特徴である。特によく捕食されている動物はシロハラクイナ、シロハラ、キシノウエトカゲ、サキシマヌマガエル、マダラコオロギ、クマネズミなどであるが、地域的に変異が大きい。行動圏は1~5km²であるが地域、季節、個体によって差が大きい。また、雄の中には定住せずに広範囲を放浪する個体が見られる。低地部、特に環境としては湿地、沢沿い、山麓の林縁部などがよく利用されている。繁殖活動は特に期間を限定せず周年行なわれていると考えられるが、発情は主に12~3月頃(1月がピーク)にみられ、4~6月に子育てをする。

生息地の条件: 林縁部、低地部、河川沿い、湿地等の水系に富む環境がイリオモテヤマネコの好適生息地であり、その維持が必須である。

現在の生息状況: 推定生息個体数は1994年に約100頭と報告されており、その時点で安定傾向であると考えられていた。しかし、近年生息環境の改変が加速されていることから減少傾向も懸念され、西表島の上にしか生息しない種であることを考慮すると絶滅の可能性は常に大きいと考えられる。

学術的意義・評価: 世界中で西表島の上に生息する種であり学術的価値は高い。またネコ科の典型的な生活型を持つことから、ネコ科の進化を探る上でも貴重な資料を提供する種と期待される。

生存に対する脅威: 観光開発、道路改修、農地改良などによる生息環境の改変・悪化、好適生息地の減少は最も大きな問題である。その他に交通事故、イヌによる捕食、なども生息阻害要因となっている。現在のところ調査がなされていない、あるいはこれまでのモニタリングでは検出されていないが常時懸念されるものとしては、ノネコとの交雑、ノネコとの競争、伝染病の侵入などの問題がある。

特記事項: 国指定特別天然記念物(1977年)、国内希少野生動植物種(1994年)。

原 記 載: Imaizumi, Y., 1967. A new genus and species of cat from Iriomote, Ryukyu Islands. *J. Mammal. Soc. Jap.*, 3 (4): 74-105.

参 考 文 献: 今泉吉典・今泉忠明・茶畑哲夫, 1975. イリオモテヤマネコの生態及び保護に関する研究, 第1次報告. 環境庁, 東京.

今泉吉典・今泉忠明・茶畑哲夫, 1976. イリオモテヤマネコの生態及び保護に関する研究, 第2次報告. 環境庁, 東京.

今泉吉典・今泉忠明・茶畑哲夫, 1977. イリオモテヤマネコの生態及び保護に関する研究, 第3次報告. 環境庁, 東京.

Izawa, M., T. Doi and Y. Ono, 1991. Ecological study on the two species of Felidae in Japan. "Wildlife Conservation". JWRC., Tokyo, 141-143.

Izawa, M., N. Sakaguchi and T. Doi, 2000. Recent conservation programs for the Iriomote cat, *Felis iriomotensis*. *Tropics*, 10 (1): 79-85.

Johnson, W. E., F. S. Shinyashiki, M. M. Raymond, C. Driscoll, M. Bush, D. Wildt, N. Yuhki and S. J. O'Brien, 1999. Molecular genetic characterization of two insular Asian cat species, Bornean bay cat and Iriomote cat. In: *Evolutionary Theory and Processes: Modern Perspectives*, Kluwer Academic Publishers.

環境庁自然保護局, 1985. イリオモテヤマネコ生息環境等保全対策調査報告書. 環境庁, 東京.

Masuda, R., M. C. Yoshida, F. Shinyashiki and G. Bando, 1994. Molecular phylogenetic status of the Iriomote cat *Felis iriomotensis*, inferred from mitochondrial DNA sequence analysis. *Zool. Sci.*, 11: 597-604.

Nowell, K. and P. Jackson (eds), 1996. *Wild Cats. Status Survey and Conservation Action Plan*. IUCN, Gland, Switzerland.

Okamura, M., T. Doi, N. Sakaguchi and M. Izawa, 2000. Annual reproductive cycle of the Iriomote cat *Felis*

iriomotensis. Mammal Study, 25 : 75-85.

岡村麻生・鐘 雅哉・伊澤雅子・土肥昭夫・阪口法明・辺土名朝洋・具志堅篤・玉城米吉, 2003. イリオモテヤマネコの交通事故とその防止に向けての試み. 第2回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集, 67-74.

Sakaguchi, N., 1994. Ecological aspects and social system of the Iriomote cat *Felis iriomotensis* (Carnivora; Felidae). Ph. D. thesis. Kyushu University.

阪口法明・村田 行・西平守孝, 1990. イリオモテヤマネコの糞内容物からみた食性の地域変異. 沖縄島嶼研究, (8): 1-14.

Schmidt, K., N. Nakanishi, M. Okamura, T. Doi and M. Izawa, 2003. Movements and use of home range in the Iriomote cat (*Prionailurus bengalensis iriomotensis*). J. Zool., Lond., 261 : 276-283.

渡辺伸一・中西 希・阪口法明・土肥昭夫・伊澤雅子, 2001. 地理情報と追跡データを用いたイリオモテヤマネコの生息地解析. 地理情報システム学会論文集, 10: 345-348.

渡辺伸一・中西 希・阪口法明・土肥昭夫・伊澤雅子, 2002. 衛星リモートセンシングによる土地被覆の時系変化とイリオモテヤマネコの生息状況の時空間解析. 国際景観生態学会日本支部会誌, 7: 25-34.

Watanabe, S., N. Nakanishi, and M. Izawa. 2003. Habitat and prey resource overlap between the Iriomote cat *Prionailurus iriomotensis* and introduced feral cat *Felis catus* based on assessment of scat content and distribution. Mammal Study, 28 : 47-56.

安間繁樹, 1980. イリオモテヤマネコの採食行動. 東京大学農学部演習林報告, (70): 81-140.

執筆者名: 伊澤雅子

和名: ジュゴン

分類: 海牛目 ジュゴン科

学名: *Dugong dugon* Müller, 1776

方言名: ザン・ザンノイヨ・ザンノイユ・アカンガイユ (以上南西諸島全般) ヨナタマ・ヨナイトマ (宮古諸島) ザヌ (新城島) ザノ (西表島) ケーバ (琉球王府公用語)

カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態: 尾びれは三角形、背びれ、後肢はない。ひれ状の前肢付け根に乳頭。上唇は馬蹄形で剛毛が生える。全身に長柔細毛と短剛毛が生える。オスでは上顎の第二切歯が牙状に伸び、歯ぐきを貫く。

近似種との区別: 分類学的近似種はマナティー科3種。マナティーとの違いは、尾びれはジュゴンで三角形、マナティーはへら状。ジュゴンのオスの牙状第二切歯の萌出はマナティーにはない。ジュゴンの前肢には爪はないが、アメリカ及びアフリカマナティーには爪がある。頭部はジュゴンの方が大きい。耳孔はジュゴンでは視認可、マナティーでは困難。ジュゴンはインド・太平洋、マナティーは大西洋が分布域故、野外での誤認の可能性はない。沖縄県における誤認可能動物は鯨類である。誤認可能鯨類はスナメリ、コマッコウ2種、コビレゴンドウ・オキゴンドウ・ハナゴンドウの幼体、ユメゴンドウ、カズハゴンドウ。誤認可能種との違いは、以下の点である。スナメリ以外の種は背びれがある。鯨類には毛がない。鯨類の歯は円錐形、ジュゴンは白歯のみ(切歯以外は)。ジュゴンでは上顎咀嚼板先端が顔の前部に見えるが、鯨類にはこの板はない。

分布の概要: 確実な出現記録(標本、写真などが存在)があるのは1965年以降宮古島と沖縄本島だけであり、大部分は本島。本島では最近の正確な出現記録、目視記録共に東海岸が非常に多い(表1、図1、図2参照)。

表1 沖縄ジュゴンの調査個体記録
(図表は内田, 2001 を改変)

捕獲日	捕獲地	性別	体長(cm)	体重(kg)	出現状況
DATE CAUGHT	AREA CAUGHT	SEX	BL(cm)	BW(kg)	WAY FOUND
1	25.10.1965 東海岸・池間島	M	203	349?	刺網・罾網
2	1967?1968? 佐良浜・伊良部島	M	ca.260	ca.300	不明(ダイナマイト漁?)
3	18.01.1979 嘉陽・名護市	F	159	95	刺網・罾網
4	27.03.1982 漢名・宜野座村	M	251	267	死体漂着
5	24.04.1984 金武湾・具志川市	M	262	-	死体漂着
6	04.01.1988 富祖崎・佐敷町	F	251	290	死体漂着
7	14.01.1988 古知谷・宜野座村	M	187	146	死体漂着
8	18.05.1990 嘉陽・名護市	M	117	39	刺網・罾網
9	09.05.1992 金武湾・金武町	M	200	173	定置網入網・保護
10	09.05.1992 金武湾・金武町	F	266	374	定置網入網・死亡
11	04.12.1993 金武湾・金武町	M	196	-	定置網入網・放流
12	28.12.1995 安部・名護市	F	296	560	定置網入網・死亡
13	15.01.1996 古宇利島・今帰仁村	M	ca.300	-	定置網入網・死亡
14	22.01.1997 漢名・宜野座村	M	267	-	定置網入網・放流
15	13.11.1998 平安座島・与那城村	M	110	31.7	刺網・罾網
16	01.04.1999 宮城・東村	-	ca.300	-	死体漂着(腐乱)
17	05.04.2000 慶渡茂原・宜野座村	M	255	190	死体漂着(腐乱)
18	27.08.2000 瀬原島沖・本部町	F	298	395	死体浮遊
19	13.11.2000 漢名・宜野座村	F	218	243	定置網入網・死亡
20	26.04.2004 伊奈武瀬沖・読谷村	F	ca.250	-	定置網入網・放流

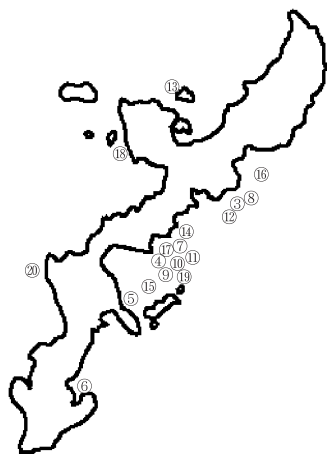


図1 ジュゴン調査個体の分布, 沖縄本島
1979 - 2004



図2 ジュゴン調査個体の分布, 池間島と伊良部島
1965 - 1967? 1968?

近縁な種及び群との分布状況の比較: 近縁種は沖縄近海には存在しない。

生態的特徴: リーフ内に生育する海産種子植物だけを採食する。ウミジグサ、リュウキュウスガモ、ウミヒルモなどである。一日の採食量は体重の10~16%と推定される。一産一仔で妊娠期間は約一年、授乳期間は18ヶ月、仔は母獣の前肢付け根にある乳頭を母体の後側からくわえ吸乳する。性成熟年令は9~10才(体長2.4m)、寿命は約70年。

体温は35前後、呼吸間隔の平均値は年令によって違い、55秒から3分48秒、最大13分20秒の記録がある。時速3kmでかなり距離を移動できる。

生息地の条件: 食草はサンゴ礁域の浅海に生育する海産種子植物のみである。本種の生息分布する望ましい環境条件は海水温、気温共に20以上であると思われ、最寒月の平均気温が16.0~18.1の沖縄が分布の北限

たる所以である。

現在の生息状況： 1965 - 2004年における確実な出現記録は20例であり、うち18例（90%）が沖縄本島、2例（10%）が宮古島である。本島18例中15例（83%）が東海岸、3例（17%）が西海岸である。目視例も東海岸が多く、本島の金武崎から天仁屋崎にかけてわずかな頭数が生息しており、時として西海岸へも回遊するものと考えられる。

学術的意義・評価： 本種の西側の分布北限は紅海北端であり、東側が南西諸島である。北限ということは本諸島個体群が絶滅すれば、フィリピン諸島北部に南下してしまう。この点から、本島生息ジュゴン保全の意義は非常に高い。本種は野生個体、飼育個体共に未調査であり、未解明のことが多い。とりわけ飼育することによってのみ知り得る繁殖生態生理に関する知見は少なく、沖縄におけるわずかな調査例が呼吸法、心拍数、血液性状についての重要な知見となっている程である。遺伝学調査も殆ど無い。こうした点から、学術的に極めて高い価値を有している。

生存に対する脅威： 幼体に関しては、オオメジロザメ、イタチザメ、ホホジロザメなどの大型サメ類による捕食。赤土、生活排水、海岸工事等、沿岸水の汚染による食草の枯渇。刺網、各種定置網による混獲。記載の出現20例中12例（60%）が網による混獲、6例（30%）が死体漂着、死体浮遊、不明各1例（5%）である。死体は混獲死による可能性もあるので、網漁業を休止すれば混獲死は防止できる。しかし、操業中の漁業の中止については漁業者の生活を十二分に配慮し、十分な話し合いによって完全な合意に達した上で実施しなければならない。沖縄県におけるジュゴン調査は極めて不十分である。八重山諸島については殆ど行われていない。とりわけ西表島では重要である。その他久米島、慶良間諸島でも確認はないが目視情報がある。全離島も含め綿密な調査が必要。

特記事項： 国指定天然記念物（1972）。

原 記 載： Müller, 1776

参 考 文 献： 神谷敏郎・内田詮三・鳥羽山照夫・吉田征紀，1979．ジュゴンの観察（1）（比較解剖学の立場から）．
鯨研通信，325： 25 34 ．

神谷敏郎・内田詮三・鳥羽山照夫・吉田征紀，1979．ジュゴンの観察（2）（比較解剖学の立場から）．
鯨研通信，326： 35 42 ．

Marsh, H., Heinsohn, G. E., and Marsh, L. M., 1984d. Life history, breeding cycle, and population dynamics of the dugong, *Dugong dugon*. (Sirenia, Dugongidae) Aust. J. Zool., 32 : 767 788

Nishiwaki, M. & H. Marsh., 1985. Dugong. *Dugong dugon* (Muller, 1776). "Handbook of Marine Mammals : The Sirenian and Baleen Whales, Vol. 3.", S. H. Ridgway and R. Harrison F. K. S. (ed.).

内田詮三，1991．海牛類研究と水族館について．国際海洋生物研究所報告，2： 47 59 ．

執 筆 者 名： 内田詮三

3) 絶滅危惧 I B類(EN)

和 名： オキナワコキクガシラコウモリ

分 類： 翼手目 キクガシラコウモリ科

学 名： *Rhinolophus pumilus pumilus* Andersen, 1905

方 言 名： カーブヤー（沖縄島でコウモリ類一般を指す）

カ テ ゴ リ ー： 絶滅危惧 I B類(EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I B類(EN)

形 態： 体毛の色は褐色系であるが、まれに黄色系も点在する。前腕長37~42mm、頭胴長38~46mm、尾長18~24mm、体重5~8g。雌の前腕長が雄より少し長い性的二型がある。

近似種との区別： 前腕長は、ミヤココキクガシラコウモリ*R. p. miyakonis*（38~39mm）やオリコキクガシラコウモリ*R. cornutus orii*（36.5~39mm）よりやや長く、コキクガシラコウモリ*R. c. cornutus* とほぼ等しく、ヤエヤマコキクガシラコウモリ*R. perditus*（40~44mm）よりやや短い。鼻葉前葉がヤエヤマコキクガシラコウモリより小さく、前葉幅は7.5mm以下である。上顎歯列長（犬歯~第3臼歯）は6mm前後でヤエヤマコキクガシラコウモリより短い。

分布の概要： 沖縄島、宮城島、久米島、渡嘉敷島、伊平屋島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： オリコキクガシラコウモリは奄美諸島に、ミヤココキクガシラコウモリは宮古

島に、ヤエヤマコキクガシラコウモリは八重山諸島に生息する。

生態的特徴: 交尾期は11月～1月。特定の洞窟で出産保育コロニーを形成し(出産・保育期以外はほとんどいない)、5～6月に出産する。洞窟により冬眠する個体群としないものがある。

生息地の条件: 通常のねぐらの他に温湿度変化の少なく人による攪乱のない出産・保育用の洞窟(繁殖洞)も必要とする。また、冬眠をしない個体には温湿度の安定した冬季のねぐらと、近くに年間を通じて小型昆虫類の発生する安定した森林が必要である。一方、冬眠する個体(特に雌)には低温で温湿度が安定した攪乱のない洞窟が必要である。飛翔力があまりないので、このような条件の異なる複数の洞窟または複数の支洞が存在する大きな洞窟が餌場の森林とともに必要である。

個体数の動向: 定量的な個体数の変化は不明である。しかし、1970年頃まではいくつもの洞窟で見られた沖縄島中部でほとんど見られなくなり、また、本部半島でもほとんど見られなくなったことから減少傾向にあることは明らかである。

現在の生息状況: 沖縄島の北部では100頭以上生息する洞窟が数カ所点在しているが、繁殖洞は3カ所しか知られていない。1960年代には各所に生息洞がみられた中部では、浦添市と中城村を除き米軍基地内の洞窟以外からは知られておらず、宮城島は絶滅したと思われる。浦添市では数頭、南部では数百頭以下のコロニーが数カ所点在している。久米島では以前は千頭程度が確認されていたが、1987年の時点では10頭ほどに激減している。渡嘉敷島では1978年に60頭程が確認されている。伊平屋島は1992年に数頭の採集・目撃があるだけである。

学術的意義・評価: 中部琉球の固有種である。琉球列島のコキクガシラコウモリ類は分化が進んでいて、各島嶼での遺伝的固有化が進んでいると予想されるが、その全貌の解明はこれからの研究に委ねられている。

生存に対する脅威: 土地改良などの開発による生息洞窟の消滅・破壊、生息洞窟の観光化、洞窟周辺の森林の伐採による洞窟の温湿度の不安定化と餌場の消失、廃棄物の洞窟への投棄による生息洞の破壊などが脅威と考えられる。人の頻繁な侵入によって、繁殖洞での繁殖が確認できなかったことがあり、場合によっては洞窟を放棄することも考えられる。

特記事項: 名護市指定天然記念物(1992年)

原 記 載: Andersen, K., 1905. On some bats of the genus *Rhinolophus*, with remarks on their mutualaffinities, and descriptions of twenty six new forms. Proc. Zool. Soc. Lond., 1905: 75-145.

参 考 文 献: 原田正史・鈴木 仁・林 良恭, 1996. チトクロームbの塩基配列解析からみたコキクガシラコウモリ類の分子系統, 日本哺乳類学会1996年度大会プログラム・講演要旨集, 39.

前田喜四雄, 1994. オキナワコキクガシラコウモリ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 44.

前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.

丸山勝彦, 1993. 伊平屋島の哺乳類. 沖縄生物教育研究会誌, (25): 3-6.

丸山勝彦, 1999. 沖縄島羽地における洞窟棲コウモリ2種の前腕長, 体重と精巢の大きさの季節変化. 沖縄生物学会誌, 37: 15-19.

沢田 勇・内川公人・原田正史, 1987. 森林破壊がコウモリの生息に及ぼす影響について - 南西諸島および台湾をフィールドとして - . 日産科学振興財団研究報告書, 10: 229-242.

下謝名松栄, 1976. カラー百科シリーズ④ 沖縄の自然島の自然と鍾乳洞. 新星図書, 那覇.

下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島の洞窟動物. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第16集 沖縄県洞穴実態調査報告II”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 97-153.

Yoshiyuki, M., 1989. A systematic study of the Japanese Chiroptera. Nat. Sci. Mus., Tokyo.

執 筆 者 名: 丸山勝彦

和 名: リュウキュウユピナガコウモリ(コユピナガコウモリ)

分 類: 翼手目 ヒナコウモリ科

学 名: *Miniopterus fuscus* Bonhote, 1902

方 言 名: カーブヤー(沖縄島でコウモリ類一般を指す)

カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧ⅠB類(EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類(EN)

形 態: 翼が幅の割に長いという特徴をもつユピナガコウモリの仲間(*Miniopterus*)であり、前腕長が43~47mm。

- 近似種との区別: 本州、四国、九州産のコウモリ (*M. fuliginosys*) より小型である。
- 分布の概要: 奄美諸島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島。黒島でも捕獲例があるが安定的に分布しているかどうかは不明。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較: 本州、四国、九州には別種コウモリが生息する。
- 生態的特徴: 5月末から6月初めに、1仔を出産。1ヶ月くらいで飛翔可能になり、独立する。冬季も活動する。
- 生息地の条件: 温度・湿度が安定した洞窟を昼間の休息場所とし、夜間は採餌をする森林が必要である。
- 個体数の動向: 過去に個体数に関する調査が行われておらず、現在でも調査が進めば、新しい生息洞窟が見つかる可能性が残っており、個体数の本当の増減は不明。
- 現在の生息状況: 西表島大富地区に大きな集団(4000個体以上)が周年生息する。その他の大きな集団としては、繁殖期に沖縄島南部の1つの洞窟に沖縄島のすべての雌成獣(約10000個体)が集まって、出産・子育てをすることが知られている。したがって、沖縄島でこの時期にこの他の洞窟内で見られる本種はいずれも育児に関与しない雄や亜成獣である。なお、他には1000頭を超えるような大きな集団は知られていない。かつては大きな群れが存在したとされる多くの洞窟でも、現在は個体数が激減したり、放棄されたりしている。なお、最近の石垣島における詳細な調査によると、500頭を超える集団は4つの洞窟で見つがっているが、繁殖集団は見つがっていないという(沖縄県のアセスメント結果の準備書縦覧による, 2004年)。
- 学術的意義・評価: 本種は奄美大島以南の南西諸島固有種である。
- 生存に対する脅威: 土地改良にともなう洞窟の減少や内部の環境変化、および森林の減少。生息洞窟の人間による攪乱、特に出産・保育洞窟では致命的である。
- 特記事項: 長距離を持続的に飛翔することができるコウモリであるので、沖縄島のような繁殖状態が起こる可能性もある。現在生息が知られていない宮古島などにも、かつては生息していた可能性があり、森林が減少したことにより、他の島に移住したとも考えられる。
- 原 記 載: Bonhote, J. L., 1902. On some mammals obtained by the Hon N. Charles Rothschild from Okinawa, Liu kiu Island. *Novitates Zoologicae*, 9: 626-628.
- 参 考 文 献: 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
- 前田喜四雄, 2002. リュウキュウコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 78-79.
- 前田喜四雄・赤澤 泰, 1999. 飛翔コウモリの通過個体数確認の試み. *哺乳類科学*, 39(2): 221-228.
- 前田喜四雄・橋本 肇, 2002. 西表島産3種の小型コウモリ類の採餌環境(1) いわゆる開けた場所と樹木に被われた場所の差異. *東洋蝙蝠研究所紀要*, (2): 18-20.
- 前田喜四雄・沢村澄子, 1997. リュウキュウコウモリ. “レッドデータ 日本の哺乳類”, 日本哺乳類学会(編), 文一総合出版, 東京, 52-53.
- 前田喜四雄・長岡浩子・田村常雄, 2003. 小型コウモリ類の絶滅したと想像される南西諸島の3島と現存している島の森林率. *東洋蝙蝠研究所紀要*, (3): 21-23.
- 丸山勝彦, 1999. 沖縄島羽地における洞窟棲コウモリ2種の前腕長, 体重と精巣の大きさの季節変化. *沖縄生物学会誌*, 37: 15-19.
- 沢田 勇・内川公人・原田正史, 1987. 森林破壊がコウモリの生息に及ぼす影響について 南西諸島および台湾をフィールドとして. *日産科学振興財団研究報告書*, 10: 229-242.
- 下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄県洞穴実態調査報告3”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 103-142.
- 高平兼司, 1982. 西表島大富洞における翼手類3種の日周期活動. *Majaa*, (2): 1-8.
- 田村常雄, 2002. 沖縄県におけるリュウキュウコウモリ *Miniopterus fuscus* の生活史と移動習性. 琉球大学大学院理工学研究科修士論文.
- 執 筆 者 名: 前田喜四雄

和 名: リュウキュウテングコウモリ

分 類: 翼手目 ヒナコウモリ科

学 名: *Murina ryukyuana* Maeda et Matsumura, 1998

方 言 名: 不明であるが、沖縄島ではコウモリ類一般はカーブヤーとよばれる。

カ テ ゴ リ ー: 絶滅危惧 I B 類(EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類(EN)

形態： 鼻孔の先端が突出し、前外方を向く、翼は短く相対的に幅広い。

近似種との区別： 本土産のコテングコウモリ (*M. ussuriensis*) に似るが、大型であり、体毛もやや黒っぽい褐色であり、本種とは異なる。

分布の概要： 沖縄島、徳之島、奄美大島。沖縄島では北部のいわゆるやんばるの森。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 前述のコテングコウモリは屋久島、九州、対馬、四国、本州、北海道に分布する。

生息地の条件： 大木のある照葉樹林である。

現在の生息状況： 沖縄島やんばる地域から記録があるが、それでも10頭に満たない。他の島での分布域も極限されている。

学術的意義・評価： 本種は南西諸島固有種である。

生存に対する脅威： 原生的照葉樹林の消失。

原 記 載： Maeda, K. and S. Matsumura, 1998. Two new species of Vespertilionid bats, *Myotis* and *Murina* (Vespertilionidae: Chiroptera) from Yanbaru, Okinawa Island, Okinawa Prefecture, Japan. Zool. Science, 15: 301-307.

参 考 文 献： 前田喜四雄, 2000. 徳之島からのリュウキュウテングコウモリ, *Murina ryukyuana* Maeda & Matsumura, 1998の記録. 沖縄生物学会誌, 38: 65-67.

前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.

前田喜四雄, 2002. リュウキュウテングコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1. 哺乳類”, 環境省 (編), 自然環境研究センター, 東京, 80-81

前田喜四雄・赤澤 泰・松村澄子, 2001. 南西諸島徳之島におけるコウモリ類の生息実態およびコウモリ類の新記録. 東洋蝙蝠研究所紀要, (1): 1-9.

前田喜四雄・西井一浩・小栗太郎, 2002. 奄美大島からのヤンバルホオヒゲコウモリ *Myotis yanbarenensis* とリュウキュウテングコウモリ *Murina ryukyuana* の初記録. 東洋蝙蝠研究所紀要, (2): 16-17.

執 筆 者 名： 前田喜四雄

4) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

和 名： ヤエヤマコキクガシラコウモリ

分 類： 翼手目 キクガシラコウモリ科

学 名： *Rhinolophus perditus perditus* Andersen, 1918

方 言 名： カブル (石垣島でコウモリ類一般を指す)

カ テ ゴ リ -： 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧ⅠB類(EN)

形 態： 翼の長さと比較して相対的に幅が広い特徴をもつ、キクガシラコウモリの仲間 (*Rhinolophus*) であり、本種の中では小型で前腕長が40~44mm。

近似種との区別： 沖縄島産のオキナワコキクガシラコウモリよりはやや大型。西表島産は別亜種イリオモテコキクガシラコウモリ *R. p. imzizumii* との区別は不可能。

分布の概要： 石垣島。小浜島や竹富島からも記録があるが、本亜種か否かは不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 西表島産は別亜種 (イリオモテコキクガシラコウモリ)、沖縄島産は別種 (オキナワコキクガシラコウモリ)、宮古島産はオキナワコキクガシラコウモリの別亜種 (ミヤココキクガシラコウモリ)。

生態的特徴： イリオモテコキクガシラコウモリと同じと思われる。

生息地の条件： 西表島産の別亜種と同様に、温度・湿度が安定した洞窟を昼間の休息場所とし、夜間は採餌をする森林が必要であると思われる。

個体数の動向： 過去に個体数に関する調査が行われておらず、詳細な比較は不可能である。ただし、過去にたくさん生息していたという洞窟が現在ではほとんど使用されていないという例はあるが、そこで生息していた個体が絶滅したか、あるいはどこかに移動して生き延びているかは不明である。

現在の生息状況： 洞窟内のグアノの堆積量から、かつては大きな集団が生息していたと推測されている洞窟がいくつかあるが、8年前の調査時には、すでにその多くが放棄されているか、個体数が激減しており、500頭を越える集団はまったく見つからなかった。最近の詳細な調査によると6洞窟で500頭を越える集団が見

つかったようである（沖縄県のアセスメント結果の準備書縦覧による，2004年）。

学術的意義・評価：本種は八重山諸島固有種である。

生存に対する脅威：土地改良にともなう洞窟の減少や内部の環境変化、および森林の減少や孤立化。

特記事項：別亜種になっている西表島産のイリオモテコキクガシラコウモリとの形態的な区別は不可能である。

原 記 載： Andersen, K., 1918. Diagnosis of new bats of the Families Rhinolophidae and Megadermatidae. *Annals and Magazin of Natural History*, Ser. 9, 2 : 374 384.

参 考 文 献： 前田喜四雄，1994．ヤエヤマコキクガシラコウモリ．“日本の哺乳類”，自然環境研究センター（編），東京大学出版会，東京，45

前田喜四雄・松村澄子，1997．ヤエヤマコキクガシラコウモリ．“レッドデータ 日本の哺乳類”，日本哺乳類学会（編），文一総合出版，東京，38 39．

前田喜四雄・沢村澄子，1997．ヤエヤマコキクガシラコウモリ．“改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”，環境省（編），自然環境研究センター，東京，56 57

前田喜四雄・長岡浩子・田村常雄，2003．小型コウモリ類の絶滅したと想像される南西諸島の3島と現存している島の森林率．*東洋蝙蝠研究所紀要*，(3): 21 23．

沢田 勇・内川公人・原田正史，1987．森林破壊がコウモリの生息に及ぼす影響について - 南西諸島および台湾をフィールドとして．*日産科学振興財団研究報告書*，10: 229 242．

下謝名松栄，1980．先島（宮古諸島・八重山諸島）の洞窟動物．“沖縄天然記念物調査シリーズ第19集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅲ”，沖縄県教育委員会，那覇，103 142．

執 筆 者 名： 前田喜四雄

和 名： イリオモテコキクガシラコウモリ

分 類： 翼手目 キクガシラコウモリ科

学 名： *Rhinolophus perditus imaizumii* Hill et Yoshiyuki, 1980

方 言 名： キシャラ（西表島での小型コウモリ類の一般名）

カ テ ゴ リ ー： 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形 態： 翼の長さに対して比較的幅が広い特徴をもつ、キクガシラコウモリの仲間 (*Rhinolophus*) であり、本種はその中では小型で前腕長が40～44mm。

近似種との区別： 沖縄島産のオキナワコキクガシラコウモリ *R. pumilus* よりはやや大型。石垣島産の別亜種ヤエヤマコキクガシラコウモリ *R. p. perlitus* との区別は不可能。

分 布 の 概 要： 西表島。小浜島や竹富島にも小型のキクガシラコウモリが生息するがヤエヤマコキクガシラコウモリが本亜種かは同定不可能。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 石垣島産は別亜種（ヤエヤマコキクガシラコウモリ）、沖縄島産は別種（オキナワコキクガシラコウモリ）、宮古島産はオキナワコキクガシラコウモリの別亜種（ミヤココキクガシラコウモリ）。

生 態 的 特 徴： 5月中旬から末にかけて、雌親の集団を作り、そこで1仔を出産。1ヶ月弱で飛翔可能になり、独立する。冬季も活動する。

生息地の条件： 温度・湿度が安定した洞窟を昼間の休息場所とし、夜間は採餌をする森林が必要である。

個体数の動向： 過去に個体数に関する調査が行われておらず、詳細な比較は不可能である。ただし、過去にたくさん生息していたという洞窟が現在ではほとんど使用されていないという例はあるが、そこで生息していた個体が絶滅したか、あるいはどこかに移動して生き延びているかは不明である。

現在の生息状況： 大富地区に大きな集団（5000個体以上）が周年生息する。年間を通しての500個体を越える群れの形成される洞窟は他には知られていない。

学術的意義・評価： 本種は八重山地区固有種である。

生存に対する脅威： 土地改良にともなう洞窟の減少や内部の環境変化、および森林の減少や孤立化。

特記事項： 別亜種になっている石垣島産のヤエヤマコキクガシラコウモリとの形態的な区別は不可能である。

原 記 載： Hill, J. E. and M. Yoshiyuki, 1980. A new species of *Rhinolophus* (Chiroptera, Rhinolophidae) from Iriomote Island, Ryukyu Islands, with notes on the Asiatic members of the *Rhinolophus pusillus* group. *Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo*, Ser. A, 6 : 179 189.

- 参 考 文 献: 前田喜四雄, 2002. ヤエヤマコキクガシラコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省 (編), 自然環境研究センター, 東京, 56-57.
- 前田喜四雄・赤澤 泰, 1999. 飛翔コウモリの通過個体数確認の試み. 哺乳類科学, 39(2): 221-228.
- 前田喜四雄・橋本 肇, 2002. 西表島産3種の小型コウモリ類の採餌環境(1)いわゆる開けた場所と樹木に被われた場所の差異. 東洋蝙蝠研究所紀要, (2): 18-20.
- 前田喜四雄・松村澄子, 1997. ヤエヤマコキクガシラコウモリ. “レッドデータ 日本の哺乳類”, 日本哺乳類学会(編), 文一総合出版, 東京, 38-39.
- 前田喜四雄・長岡浩子・田村常雄, 2003. 小型コウモリ類の絶滅したと想像される南西諸島の3島と現存している島の森林率. 東洋蝙蝠研究所紀要, (3): 21-23.
- 松村澄子, 1988. コウモリの生活戦略序論. 東海大学出版会, 東京.
- 沢田 勇・内川公人・原田正史, 1987. 森林破壊がコウモリの生息に及ぼす影響について - 南西諸島および台湾をフィールドとして. 日産科学振興財団研究報告書, 10: 229-242.
- 下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄天然記念物調査シリーズ第19集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅲ”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 103-142.
- 高平兼司, 1982. 西表島大富洞における翼手類3種の日周期活動. *Majaa*, (2): 1-8.

執 筆 者 名: 前田喜四雄

和 名: カグラコウモリ
分 類: 翼手目カグラコウモリ科
学 名: *Hipposideros turpis* Bangs, 1901
方 言 名: キシャラ(西表島での小型コウモリ類一般を指す)
カ テ ゴ リ -: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧IB類(EN)

形 態: 大型のカグラコウモリの仲間(*Hipposideros*)であり、前腕長が65~72mm。
近似種との区別: 台湾に近似種タイワンカグラコウモリ*H. terasensis*が生息するが、それよりは顕著に小型である。
分布の概要: 西表島、与那国島、波照間島、石垣島。
近縁な種及び群との分布状況の比較: 台湾に近縁種タイワンカグラコウモリが生息する。より系統的に近い種がマレー半島に生息するという意見もある。
生態的特徴: 6月に1仔を出産。1ヶ月くらいで飛翔可能になり、独立する。冬季は活動を止め、冬眠状態になる。
生息地の条件: 温度・湿度が安定した洞窟を昼間の休息場所とし、夜間は採餌をする森林が必要である。
個体数の動向: 過去に個体数に関する調査が行われておらず、詳細な比較は不可能である。ただし、過去にたくさん生息していたという洞窟が現在ではほとんど使用されていないという例はあるが、そこで生息していた個体が絶滅したか、あるいはどこかに移動して生き延びているかは不明である。
現在の生息状況: 西表島大富地区に大きな集団(15000個体以上)が周年生息する。他には、5000個体を越える群れは知られていない。かつては大きな群れがいたという多くの洞窟でも、現在は個体数が激減したり、放棄されたりしている。特に、その傾向が与那国島や波照間島で顕著である。なお、最近の石垣島における詳細な調査によると、500頭を越える集団は9つの洞窟で見つかっているという(沖縄県のアセスメント結果の準備書縦覧による、2004年)。なお、本種、あるいはその近縁種がかつて伊良部島にいた可能性もある。
学術的意義・評価: 本種は八重山諸島固有種である。
生存に対する脅威: 土地改良にともなう洞窟の減少や内部の環境変化、および森林の減少や孤立化。繁殖洞に対する人間の攪乱。
特記事項: 西表島大富地区の洞窟での生息状態が、本来の本種の生息のありかたであると思われる。

原 記 載: Bangs, O., 1901. Notes on a small collection of mammals from the Liukiu Islands. *American Naturalist*, 35: 561-562.

- 参 考 文 献: 前田喜四雄, 2002. カグラコウモリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省 (編), 日本環境研究センター, 東京, 58-59.
- 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
- 前田喜四雄・赤澤 泰, 1999. 飛翔コウモリの通過個体数確認の試み. 哺乳類科学, 39(2): 221-228.

- 前田喜四雄・橋本 肇, 2002. 西表島産3種の小型コウモリ類の採餌環境(1) いわゆる開けた場所と樹木に被われた場所の差異. 東洋蝙蝠研究所紀要, (2): 18-20.
- 前田喜四雄・松村澄子, 1997. カグラコウモリ. “レッドデータ 日本の哺乳類”, 日本哺乳類学会(編), 文一総合出版, 東京, 39-41.
- 前田喜四雄・長岡浩子・田村常雄, 2003. 小型コウモリ類の絶滅したと想像される南西諸島の3島と現存している島の森林率. 東洋蝙蝠研究所紀要, (3): 21-23.
- 松村澄子, 1988. コウモリの生活戦略序論. 東海大学出版会, 東京.
- 沢田 勇・内川公人・原田正史, 1987. 森林破壊がコウモリの生息に及ぼす影響について 南西諸島および台湾をフィールドとして. 日産科学振興財団研究報告書, 10: 229-242.
- 下謝名松栄, 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. “沖縄天然記念物調査シリーズ第19集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅲ”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 103-142.
- 高平兼司, 1982. 西表島大富洞における翼手類3種の日周期活動. *Majaa*, (2): 1-8.

執筆者名: 前田喜四雄

和名: イエコウモリ(アブラコウモリ)
 分類: 翼手目 ヒナコウモリ科
 学名: *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1840)
 方言名: カーブヤー(沖縄でコウモリ類一般を指す)
 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態: 前腕長30~37mm、頭胴長41~60mm、体重5~10g。耳珠はやや幅広く、先端は丸みを帯びる。体毛の色は、黒褐色・暗灰褐色系である。
- 近似種との区別: 本種の体の背面は灰褐色だが、モリアブラコウモリ *P. endoi* は赤褐色あるいは黄褐色を帯びる。また、本種の上顎犬歯は太く後尖は小さいが、モリアブラコウモリは上顎犬歯は細く後尖は大きい。
- 分布の概要: 県内からは、慶留間島、沖縄島、宮古島、伊良部島から、県外では、九州、本州、四国、対馬、奄美大島などから知られている。西表島や与那国島から記録があり、いくつかの島では聞き取りによる情報もあり、今後確認する必要がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較: モリアブラコウモリは、本州と四国に分布し、原生林に生息し人家近くでは見られない。
- 生態的特徴: ねぐらは屋根裏などで国内では唯一の住家性のコウモリである。草原や水面、田芋畑、グランドなど開けたところで採食する。雄は生まれて1年目の秋には性成熟し、成獣の多くは1年以内に死亡する。
- 生息地の条件: ねぐらとなる1cm以上の隙間のある建物や、採餌場となる草原や水場、畑など昆虫の発生する環境が必要である。
- 個体数の動向: 以前の生息状況が全く不明であり、近年の個体数の変化も把握できていない。古い目撃記録もあるが、田舎では昔はコキクガシラコウモリ類も屋内へ入ってきていたので、部屋の中で見たという目撃例では識別できない。
- 現在の生息状況: 沖縄島では中南部の限られた地域にしか生息していない。県内いずれの地点でも、同時に目撃されるのは数頭で、個体数は多くないと思われる。
- 学術的意義・評価: 本種とジャワアブラコウモリ *P. jaranicus* の関係や沖縄島産が四国産や台湾産より大きいことなど今後分類学的再検討が行われるであろう。
- 生存に対する脅威: 生息家屋の改築・減少によるねぐらの消失や昆虫類が発生する環境の破壊、それに有害駆除が生存の脅威となる。

原記載: Temminck, C. J., 1835/41. Monographies de Mammalogie II. 232.

- 参考文献: 伊澤雅子・前田喜四雄, 1998. 西表島で採集されたアブラコウモリ *Pipistrellus abramus* の記録. 沖縄島嶼研究, 16: 17-18.
- 前田喜四雄, 1994. アブラコウモリ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 55.
- 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌 - 翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
- 前田喜四雄・松村澄子, 1997. 翼手目 CHIROPTERA. “レッドデータ 日本の哺乳類”, 日本哺乳類学会

(編), 文一総合出版, 東京, 46.

丸山勝彦, 1992. 沖縄県におけるヒナコウモリ科2種の新記録. 沖縄生物学会誌, 30: 55-57.

岡 徹, 1994. コウモリ2種を伊良部島から記録. 沖縄生物教育研究会誌, (26): 9-11.

田村常雄, 1998. 沖縄県におけるアブラコウモリ (*Pipistrellus abramus*) の生態学的研究. 琉球大学理学部生物学科卒業論文.

谷口勝直・峰岸秀雄・木下あけみ, 1990. アブラコウモリ生態資料(2). 川崎市青少年科学館紀要, (1): 2328

内田照章, 1966. 日本の哺乳類(5) 翼手目イエコウモリ属. 哺乳類科学, (11): 5-23.

執筆 者 名: 丸山勝彦

5) 準絶滅危惧(NT)

和 名: ワタセジネズミ

分 類: 食虫目 トガリネズミ科

学 名: *Crocidura watasei* Kuroda, 1924

方 言 名: ビーチャー(ジャコウネズミを含む)

カ テ ゴ リ -: 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧(NT)

小型で頭胴長55~76mm、体重4~8g。背面は暗灰褐色、腹面は淡灰褐色でまれに黄味を帯びる。尾は同所的に生息するジャコウネズミ (*Suncus murinus*) に比べて細長く、頭胴長の7割前後もあり、長毛は尾の基部から半分までにしかない。後足長は16mm以下である。上顎の単尖歯は3本で、ジャコウネズミは4本である。スリランカを基準産地とするオナガジネズミ *Crocidura horsfieldii* の亜種 *C. h. watasei* とされることもあるが、現在は別種であることが明らかにされており、中部琉球固有種である。核型や塩基配列からジネズミ属の他種よりジャコウネズミに近く、ジネズミ属の分類は再検討が進められつつある。県内では渡名喜島、沖縄島、浜比嘉島、瀬底島、伊江島、伊平屋島、渡嘉敷島、阿嘉島、宮城島、久米島、硫黄島から、県外では与論島、沖永良部島、徳之島、奄美大島、喜界島などから知られている。沖縄県内では場所によってはサトウキビ畑や低地の草地に比較的普通に見られるが、それ以外の県内島嶼ではあまり見つかっておらず、多くの場合、路上死体として発見されている。また山間部には少ないようである。これまでにマングースとノネコによる捕食が報告されており、今後これらの移入捕食者の影響に十分注意するとともに、これらの駆除なども含む保護策が必要である。また、U字溝に落下して死亡した例も報告されており、生息地における構造物の形態や配置に関する見直しも必要であると考えられる。生息環境が人為的改変の影響を受けやすいため、注意が必要である。

原 記 載: Kuroda, N., 1924. On new mammals from the Riu Kiu Islands and the vicinity. Privately printed, Tokyo. 1-14.

参 考 文 献: Abe, H., 1967. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia). I. Studies on variation and classification. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55: 191-265, Pls1, 2.

Abe, H., 1968. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia). II. Biological aspects. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55: 429-458.

阿部 永, 1991. ワタセジネズミ. “日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 脊椎動物編”, 環境庁(編), 日本野生生物研究センター, 東京, 48-49

阿部 永, 1994. オナガジネズミ. 日本の哺乳類, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 26.

阿部 永, 1997. 食虫目 INSECTIVORA. “レッドデータ 日本の哺乳類”, 日本哺乳類学会(編), 文一総合出版, 東京, 19-30.

阿部 永, 2002. ワタセジネズミ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 1 哺乳類”, 環境省(編), 自然環境研究センター, 東京, 126.

阿部 永, 横畑泰志編. 1998. 食虫類の自然史, 比婆科学教育振興会.

服部正策, 1991. 南西諸島のトガリネズミ科. チリモス, 2: 17-26.

服部正策・吉行瑞子・浅木裕志・昇善 久, 1990. 奄美諸島におけるワタセジネズミの地理的ならびに生態的分布と形態的変異の検討. 国立科博専報, (23): 167-172.

今泉吉典, 1970. オナガジネズミ. 日本哺乳動物図説上巻, 新思潮社, 東京, 189-190.

- 今泉吉典・青木淳一・浅沼 靖・土居祥兌・小山博滋・斎藤靖二・氏家 宏, 1974. 琉球列島の自然史科学的総合研究, 調査経過の概要と研究結果の要約. 国立科学博物館専報, (7): 1-18.
- Jameson, E. W. Jr., and G. S. Jones, 1977. The Soricidae of Taiwan. Proc. Biol. Soc. Washington, 90: 459-482.
- 河内紀浩・佐々木健志, 2002. 沖縄島北部森林域における移入食肉類(ジャワマンゲース・ノネコ・ノイヌ)の分布及び食性について. 沖縄生物学会誌, 40: 41-50.
- 三井興治・池原貞雄, 1979. 与那覇岳とその周辺におけるネズミ類・食虫類の分布. 沖縄生物学会誌, (17): 7-13.
- Motokawa, M., S. Hattori, H. Ota and T. Hikida, 1996. Geographic variation in the Watase's shrew *Crocidura watasei* (Insectivora, Soricidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan. Mammalia, 60: 243-254.
- Motokawa, M., H. Suzuki, M. Harada, L. Lin, K. Koyasu, and S. Oda, 2000. Phylogenetic relationships among East Asian species of *Crocidura* (Mammalia, Insectivora) inferred from mitochondrial cytochrome b gene sequences. Zool. Sci., 17: 497-504.
- 日本野鳥の会やんばる支部. 1997. 沖縄島北部における貴重動物と移入動物の分布状況及び移入動物の食性.
- 当山昌直, 1981a. 渡名喜島の陸上脊椎動物. “沖縄県立博物館総合調査報告書 II 渡名喜島”, 沖縄県立博物館(編), 沖縄県立博物館, 那覇, 49-56.
- 当山昌直, 1981b. ワタセジネズミの分布に関する若干の知見. *Majaa*, (1): 12.

執筆者名: 丸山勝彦

和名: オリオオコウモリ
 分類: 翼手目 オオコウモリ科
 学名: *Pteropus dasymallus inopinatus* Kuroda, 1933
 方言名: カーブヤー(沖縄島でコウモリ類一般を指す)
 カテゴリー: 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

クビワオオコウモリ *Pteropus dasymallus* のうちの沖縄島と近隣島嶼に分布する亜種である。前腕長130~147mm、体重337~583g。すでに絶滅したオキナワオオコウモリ *P. loochoensis* とは頸部を中心とした体の上部の毛が明瞭に淡色である点、下腿背面まで毛がある点、体の背面で体毛長が20mm以上に達する点などで区別される。クビワオオコウモリの他亜種との違いについては、毛色や各形質の個体差が大きく、亜種間での測定値の変異幅の重なりも大きいため、ダイトウオオコウモリ *P. d. daitoensis* を除き、区別は難しい。しかしながら、飛翔能力はさほど高くないため、数百kmも離れた島嶼間を移動する可能性は低く、複数の亜種が同所的に存在する事は考えにくい。夜行性で、日中は樹木の高い枝で休息する。また、食果性でもあることから、本亜種にとっては森林環境が欠く事のできない重要な要素である。そのような環境が安定して確保されていることが生息のための条件と考えられる。移動能力が高いことや夜行性であることから個体数推定が難しく、その状況は不明であるが、クビワオオコウモリ of 全亜種の中では分布域が広く個体数は多い事が予想される。しかし、住宅地の拡大、ダムや農地開発による森林環境の減少と外来種による捕食や果樹園での網絡まりによる死亡、その他に外来産ヤシ科植物の葉に絡まって死亡するケースも確認されていることから、個体数の減少の可能性は否定できない。

原記載: Kuroda, N., 1933. A revision of the genus *Pteropus* found in the islands of the Riu Kiu Chain, Japan. *J. Mammal.*, 14: 312-316.

参考文献: 金城和三, 1999. オリオオコウモリ of 環境利用と個体間関係. 琉球大学大学院理学研究科修士論文.

中本 敦, 2003. オリオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus* の採餌戦略 餌資源の季節変化の影響. 琉球大学大学院理学研究科修士論文.

Ota, H., 1992. *Pteropus dasymallus*: Ryukyu flying fox. “Old World fruit bats: an action plan for their conservation”, S. P. Mickleburgh, A. M. Hutson and P. A. Racey(eds.), International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, 96-98.

Pierson, D. P. and W. E. Rainey, 1992. The biology of flying foxes of the genus *Pteropus*: a review. “Pacific island flying foxes: Proceedings of an international conservation conference”, D. E. Wilson and G. L. Graham(eds.), U. S. Fish and Wildlife Service, Washington, 1-17.

Yoshiyuki. M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Sci. Mus., Tokyo.

執筆者名: 金城和三

和名: ヤエヤマオオコウモリ
分類: 翼手目 オオコウモリ科
学名: *Pteropus dasymallus yayeyamae* Kuroda, 1933
方言名: カブルまたはカブル(石垣島でコウモリ類一般を指す)
カテゴリー: 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

クビワオオコウモリ *Pteropus dasymallus* の八重山諸島、多良間島、宮古諸島に分布する亜種である。前腕長125.5~137.5mm、体重318~402gでクビワオオコウモリではもっとも小型である。夜行性で、日中は樹木の高い枝で休息する。また、食果性でもあることから、本亜種にとっては森林環境が欠く事のできない重要な要素である。そのような環境が安定して確保されていることが生息のための条件と考えられる。生息個体数の把握が困難であるため、全体的な生息状況は不明であるが、西表島は森林環境が多く残されていることから、最も安定した状況であることが予想される。他の島嶼においては、季節的あるいは餌の条件によって島嶼間を移動している可能性もある。また、波照間島では森林伐採の影響と思われる個体数の減少も報告されている。昼間のねぐら、夜間の採餌場の両方を大きく樹木に依存しているため、森林環境の減少は本種の生存に最大の脅威となる。森林部においては観光、農業その他の開発によって森林環境が現在も減少している。また、空港建設による大きな環境変化の影響も懸念されている。餌量に関する定量的な調査はないが、近年石垣島においてサトウキビの食害が増加していることは、森林内の餌、特に冬期の餌の不足を示唆するものと考えられる。また、台風時には強風による直接の死亡に加えて、餌となる果実が激減することによって台風後にもかなりの死亡が確認されている。

原記載: Kuroda, N., 1933. A revision of the genus *Pteropus* found in the islands of the Riu Kiu Chain, Japan. J. Mammal., 14: 312-316.

参考文献: 沖縄県教育委員会, 1992. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集, 沖縄県教育委員会, 那覇.

Ota, H., 1992. *Pteropus dasymallus*: Ryukyu flying fox. "Old World fruit bats: an action plan for their conservation", S. P. Mickleburgh, A. M. Hutson and P. A. Racey(eds.), International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, Gland, 96-98.

Pierson, D. P. and W. E. Rainey, 1992. The biology of flying foxes of the genus *Pteropus*: a review. "Pacific island flying foxes: Proceedings of an international conservation conference", D. E. Wilson and G. L. Graham(eds.), U. S. Fish and Wildlife Service, Washington, 1-17.

Yoshiyuki. M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Sci. Mus., Tokyo.

執筆者名: 金城和三

6) 情報不足(DD)

和名: ジャコウネズミ
分類: 食虫目 トガリネズミ科
学名: *Suncus murinus* (Linnaeus, 1766)
方言名: ビーチャー
カテゴリー: 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

ジャコウネズミの1亜種とされるリュウキュウジャコウネズミ (*S. m. temminckii*) が、県内に広く分布する。県外では長崎県の一部、島嶼を含む鹿児島県に分布する。吻が長く、触毛が発達し、尾にも毛がまばらに生えている。体重はオスが45~70g、メスが30~50gである。名前の由来となったジャコウ腺があり、独特の臭いがする。仔が親のあとに連なって歩くキャラバン行動やチンチンと聞こえる警告声などが特徴的である。また、巣穴の出入り口近くや目

立つところにはため糞をする。都市部の人家から農耕地周辺、草地、河畔などに生息し、昆虫類、ミミズなどを捕食する。生息状況、分布域等についての詳細は調査されていない。

- 原 記 載: Linnaeus, C., 1766. Systema Naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis synonymis, locis., 12th ed., 1 : 74
- 参 考 文 献: Abe, H., 1967. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia). I. Studies on variation and classification. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55 : 191 265, Pls1, 2.
- Abe, H., 1968. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia). II. Biological aspects. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55 : 429 458.
- 阿部 永, 1994. ジャコウネズミ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 29.
- 池原貞雄, 1974. 慶良間群島の陸上脊椎動物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術報告, 国頭村・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 那覇, 187 199.
- Ishikawa, A., T. Yamagata and T. Namikawa, 1995. Relationships between morphometric and mitochondrial DNA differentiation in laboratory strains of musk shrews (*Suncus murinus*). Jpn. J. Genet., 70 : 57 74.
- 岸本高男・比嘉ヨシ子, 1978. 沖縄産の住家性ネズミの種類構成と繁殖. 沖縄生物学会誌 (16): 1 9.
- 黒田長禮, 1938. 日本産哺乳類目録. 自費出版 (Published by the Author)
- 織田鉄一・鬼頭純三・太田克明・磯村源蔵(編), 1985. スンクス. - 実験動物としての食虫目トガリネズミ科動物の生物学 -. 学会出版センター, 東京.
- 沢田 勇, 1993. 沖縄県下におけるジャコウネズミの分布とその条虫相について. 長崎県生物学会誌 (42): 7 11.
- 城間 侔, 1978. 水納島のリュウキュウジャコウネズミの分布. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書, 117 120.
- 城間 侔・笹岡正純, 1980. 水納島のリュウキュウジャコウネズミ. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(Ⅲ), 64 66.
- 高良鉄夫, 1954. 尖閣列島の動物相について. 琉球大学農学部学術報告(1) 54 74.
- 当山昌直, 1980. 粟国島の陸上脊椎動物. “県立博物館総合調査報告書 - (Ⅰ) - 粟国島 -”, 沖縄県立博物館, 那覇, 51 56.
- 当山昌直, 1981. 渡名喜島の陸上脊椎動物. “県立博物館総合調査報告書 - (Ⅱ) - 渡名喜島 -”, 沖縄県立博物館, 那覇, 45 56.
- 辻敬一郎・石川智彦, 1982. リュウキュウジャコウネズミ (*Suncus murinus* var *riukiuanus*) の生息状況と行動. 哺乳動物学雑誌, 9: 96 103.
- 執 筆 者 名: 伊澤雅子

和 名: オキナワハツカネズミ
 分 類: 齧歯目 ネズミ科
 学 名: *Mus caroli* Bonhote, 1902
 方 言 名: ハルエンチュ
 カ テ ゴ リ ー: 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

県内では沖縄島にのみ分布する。国外では台湾からマレー半島、スマトラまで分布する。頭胴長60~80mm、尾長61~93mm、体重8~17g。耕作地、草地、リュウキュウマツ林、耕作地に隣接したイタジイ林などに生息しており人家には少ない。繁殖活動は夏季に最も活発であるが、周年行なわれていると考えられている。妊娠期間は20日前後で、一腹仔数は3~5頭である。沖縄島で同所的に見られるヨナクニハツカネズミ *M. musculus molossinus* との区別点は、平均尾率が110%以上と高いこと、背面と腹面の2色性が顕著なことである。この2種を区別した上での分布調査は近年行なわれておらず、生息状況は不明である。沖縄や台湾など7地区のオキナワハツカネズミの塩基配列に亜種レベルの差が見られるなど遺伝的分化が生じていることが示唆されている。

- 原 記 載: Bonhote, J. L., 1902. On some small mammals obtained by the Hon. N. Charles Rothchild, from Okinawa, Liu Kiu Islands. Novit. Zool., 9 (3) : 627 628.

- 参 考 文 献: 荒井秋晴・白石 哲, 1978. オキナワハツカネズミの成長と発育. 動物学雑誌, 87: 274-282.
日高卓弥, 1982. オキナワハツカネズミの外部形態について. *Majaa*, (2): 24-26.
比嘉ヨシ子・下謝名和子, 1975. 南部の一甘蔗園場における鼠類調査. 沖縄生物学会誌, (13): 7-11.
金子之史, 1994. オキナワハツカネズミ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 109.
岸本高男・比嘉ヨシ子, 1978. 沖縄産の住家性ネズミの種類構成と繁殖. 沖縄生物学会誌, (16): 1-9.
三井興治・池原貞雄, 1979. 与那覇岳とその周辺におけるネズミ類・食虫類の分布. 沖縄生物学会誌, (17): 7-13.
本川雅治, 1995. 奄美諸島及び沖縄島におけるハツカネズミ属の外部形態と生息状況. チリモス, 6: 10-14.
Motokawa, M., L.-K. Lin and J. Motokawa, 2003. Morphological comparison of Ryukyu mouse *Mus caroli* (Rodentia: Muridae) populations from Okinawajima and Taiwan. *Zool. Studies*, 42(2): 258-267.
Terashima, M., A. Suyanto, K. Tsuchiya, K. Moriwaki, M. -L. Jin and H. Suzuki, 2003. Geographic variation of *Mus caroli* from East and South East Asia based on mitochondrial cytochrome b gene sequences. *Mammal Study*, 28: 67-72.
WWF Japan 科学委員会(編), 1984. 南西諸島とその自然保護 その I (財)世界野生生物基金日本委員会, 東京.

執 筆 者 名: 伊澤雅子

和 名: リュウキュウイノシシ
分 類: 偶蹄目 イノシシ科
学 名: *Sus scrofa riukiuanus* Kuroda, 1924
方 言 名: ヤマシシ
カ テ ゴ リ ー: 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 絶滅のおそれのある地域個体群(徳之島)(LP)

イノシシ *Sus scrofa* の琉球列島固有亜種で、県内では沖縄島、石垣島、西表島に、県外では奄美諸島に分布する。本土産亜種のニホンイノシシ *S. s. leucomystax* より小型で、体重40~50kg、頭胴長50~110cm程度である。雑食性で森林においてシイの実など多種の実、葉、根等を食べる他、草地や農耕地にも出現し、農作物を食害することもある。昆虫類、爬虫類、ミミズ他小動物も捕食する。個体数の推定は行なわれていない。狩猟統計等からは個体数の変動は大きい。人為的要因(森林環境の悪化・減少、狩猟圧等)によるもの、自然要因(台風や気候による植物の結実率の差等)によるものなどが考えられ、要因は明らかでない。個体数の変動に関するモニターが必要である。西表島、石垣島の個体群は沖縄島の個体群と遺伝的に異なる可能性も示唆されている。

- 原 記 載: Kuroda, N., 1924. On new mammals from Riu Kiu Islands and the vicinity. Privately printed, Tokyo, 1-14.
参 考 文 献: Endo, H., S. Maeda and D. Yamagiwa. 1998. Geographical variation of mandible size and shape in the Ryukyu wild pig (*Sus scrofa riukiuanus*). *J. Veter. Med. Sci.*, 60(1): 57-61.
三浦慎悟, 1994. イノシシ. “日本の哺乳類”, 自然環境研究センター(編), 東海大学出版会, 東京, 146-147.

執 筆 者 名: 伊澤雅子